

# 徳川園の歴史的考察

## (3) 徳川義禮侯邸宅の庭園について

宮崎 幸恵

The Historical Consideration of Tokugawa-en  
Part 3: The Garden of Marquis Tokugawa Yoshiakira's Residence

Sachie Miyazaki

### 1. はじめに

先の「徳川園の歴史的考察 (2)徳川義禮侯邸宅について」では、明治33年に完成した徳川義禮侯邸宅（尾張徳川家名古屋大曾根邸）の建築構成を明らかにした<sup>1)</sup>。それによれば、基本的には江戸期の大名屋敷の形態を踏襲しているが、ひとつひとつの部屋の大きさは小さくなっており、一部に当時流行の洋間を取り入れた邸宅であった。本稿では徳川義禮侯邸宅の庭園構成について検討し、その規模や形式および特徴を明らかにしようとするものである。

### 2. 調査方法

名古屋市蓬左文庫、財団法人徳川黎明会および徳川林政史研究所の協力を得て、尾張徳川家名古屋大曾根邸（徳川義禮侯邸宅）に関する史資料等を参考に調査した。

### 3. 義禮侯邸宅以前の様相

元禄8年（1695）、尾張徳川家2代藩主光友の隠居所となった時、屋敷地の面積は130,000坪あまりであった<sup>2)</sup>。当時の庭園についての史料は乏しく現在のところ不明確である。しかし、この庭園は、後述する戸山荘庭園のように東海道五十三次の景を写し、何軒かの町屋も設けていたようである<sup>3)</sup>。

光友は藩主でありながら作庭に力を発揮し、記録に残されている庭園だけでも、尾張徳川家御下屋敷庭園、尾張徳川家江戸市ヶ谷本邸庭園、尾張徳川家戸山荘庭園など多数ある。光友の作庭は諸大名に多くの影響を及ぼし、各地に大名庭園が出現した原因の一つにもなっている<sup>4)</sup>。

なかでも光友作庭の尾張徳川家江戸市ケ谷本邸庭園や尾張徳川家戸山荘庭園については多くの記録が残っており、邸内に多くの名所をつくりあげたとされている<sup>3)</sup>。

市ケ谷本邸は、面積約90,000坪を有し、楽々園と号し、庭園内に48景を設けた広大なものであった。また、戸山荘は、面積約136,000坪という広大な屋敷で、大部分が庭園であったとされ、近世の大名庭園のなかではもっとも広いものであった。武蔵野台地に入り込む谷川を取り込み、起伏に富んだ地形を生かして築造された。様式的には池泉回遊式の典型的な大名庭園であり、中央に水面20,000坪余りの大きな池が掘られたが、その揚げた土で築かれたものが玉円峰と称され、今の東京都新宿区戸山町にある戸山公園のなかにある小高い山「箱根山」である。園内には、山、川、泉、橋、谷をはじめ、田園風景としての田畑もあり、多くの社寺、茶屋が取り入れられ、東海道五十三次を模して造られた虚構の町もあったという<sup>3)</sup>。さぞかし風光明媚な空間をもった庭園であったと思われる。

元禄13年(1700)光友の死後、御殿部分を残し、庭園部分を分割して石河、渡邊の二家を始め諸藩士に下付された結果、面積は僅か50,000余坪に減少した。その後、享保5年(1720)には石河、渡邊の二家を除き、諸藩士の土地は成瀬家に返還され、これと同時に御殿も成瀬家に返還された。以来三家は下屋敷として明治維新まで所有していた<sup>2)</sup>。三家が当時の庭園をどのように維持していたかは不明である。しかし光友の作庭にかけた費用や情熱を考えると、あまり変更せずに大切に維持管理していたと考えられる。

明治元年(1868)尾張徳川家は、成瀬、石河家の下屋敷を再び上地させ別邸とした<sup>5)</sup>。また、明治維新に伴い名古屋城を明け渡すことになり、明治5年(1872)に名古屋城北部の奥山町に別邸とは別に新邸を設けた。この新邸の庭園は下御深井庭園と称せられ、江戸時代にすでに整備されていたが、使われ方は確認されていない。この庭園は蓮池を巡って大小14島(柘榴島、梨子島、弁天島、おつり島、松原島、竹藤島、中西島、蜜柑島、お高島、桃島、浮島、鷺島、稻生島、菖島)があった。その間に金毘羅宮、観音堂、宗像社、七福神の諸堂が配され、幽仙境を呈した庭園であった<sup>4)</sup>。明治23年(1890)奥山町の新邸の屋敷地が陸軍省の用地(北練兵場)となったため、この頃より大曾根の別邸の整備が始まった。大曾根の別邸に奥山町邸から多くの建物が移築されたとされている<sup>2)</sup>が、同時に奥山町邸の庭を構成していた要素(諸堂など)も移築されたのではないかと推察される。

#### 4. 大曾根邸の庭園構成

明治33年に完成した大曾根邸の庭の整備に関する記録は少なく、主屋部分が存在する邸内の庭園の様子は不明な部分が多い。しかし、大曾根邸を撮影した写真が現存し、その中に庭の写っているものがある<sup>1)</sup>。これらの写真の撮影時期については未詳であるが、和風庭園であったと推察するのに十分なものである。また、本邸の庭石には名古屋城内から移されたものが多くあっ

たと伝えられている<sup>6)</sup>。書院などの公的な空間に面した庭の写真は確認されていないが、昭和6年に大曾根邸の一部を名古屋市へ寄付した際の記録<sup>7)</sup>があり、その中には「表書院南庭」、「中書院北庭」、「東屋敷南庭」の石灯籠3基および「表書院北庭」、「使者の間前庭」、「東屋敷庭」の石手洗い鉢4個が記されている。これらにより屋敷まわりの庭園は和風を基調としていたことが判断される。

この屋敷は、東西と北を農園で囲まれており(図1)、それらは東部農園、西部農園、北部農園と称されていた。西部農園は大曾根徳川邸西部農園之図<sup>8)</sup>(図2)から判断すると現在の植物園に相当する農園であったと考えられる。植物園すなわち西部農園の面積は約12,000坪あり、デイゴ、ユーカリ、ブラッシの木など外来の珍種、葉草、花が多種栽培されていた<sup>4)</sup>。現在の名古屋市立東図書館門脇にあるユーカリの大木は当時の名残りである。南西側に博物館、また北側に付属建物として農舎、園庁舎、事務所、植物室、植物陳列場、暖室(温室)が設けられ、温室内にはホウライショやウツボカズラなどの渡来植物が栽培されていた。初代の管理者は久米安政であり、のちに佐藤保佑となった<sup>4)</sup>。このように西部農園は研究所的性格も持っていた。大曾根邸西部農園之図によれば、きれいに整備された植物園であったことが判り、徳川家の家紋を形どった庭園や円形の洋式庭園があるなど、当時の様子を伺い知ることができる。御屋敷に至るまでには、まず表御門を経て邸内に入り、この植物園の中を通ることになっていた。通路の中央部には膨らみがあり、井戸が設けられていた。現在もこの中央部の形状はほぼそのまま残されており、井戸の痕跡もある<sup>9)</sup>。またこの膨らみの部分には、現在では「尾張徳川家2代藩主光友公御手植のやぶつばき」についての説明板<sup>注1)</sup>が建てられている。

西側表御門等の痕跡はないが、表御門から正門に向かい真っすぐに設けられた道路の形状は当時のものとほぼ変わらないと推察する。西部農園之図には、大曾根邸の正門および1号、2号土蔵も記されている。また、正門付近に築山が設けられていた。正門は現在もこの位置に大

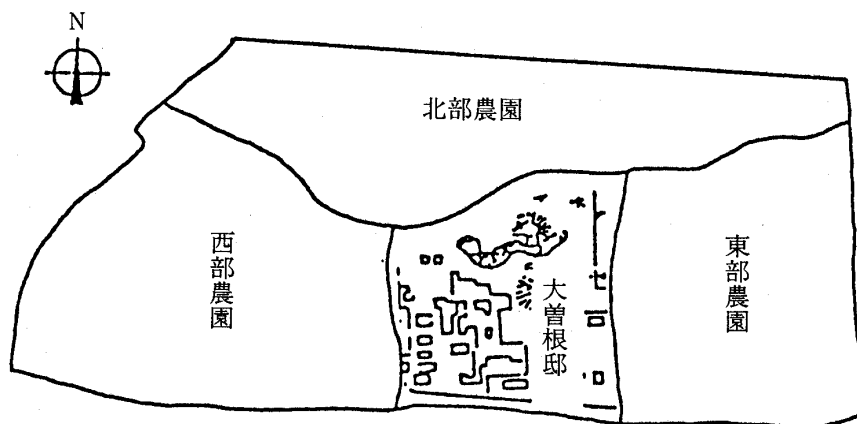


図1 大曾根邸敷地  
(名古屋市及び付近図, 明治40年より作図)

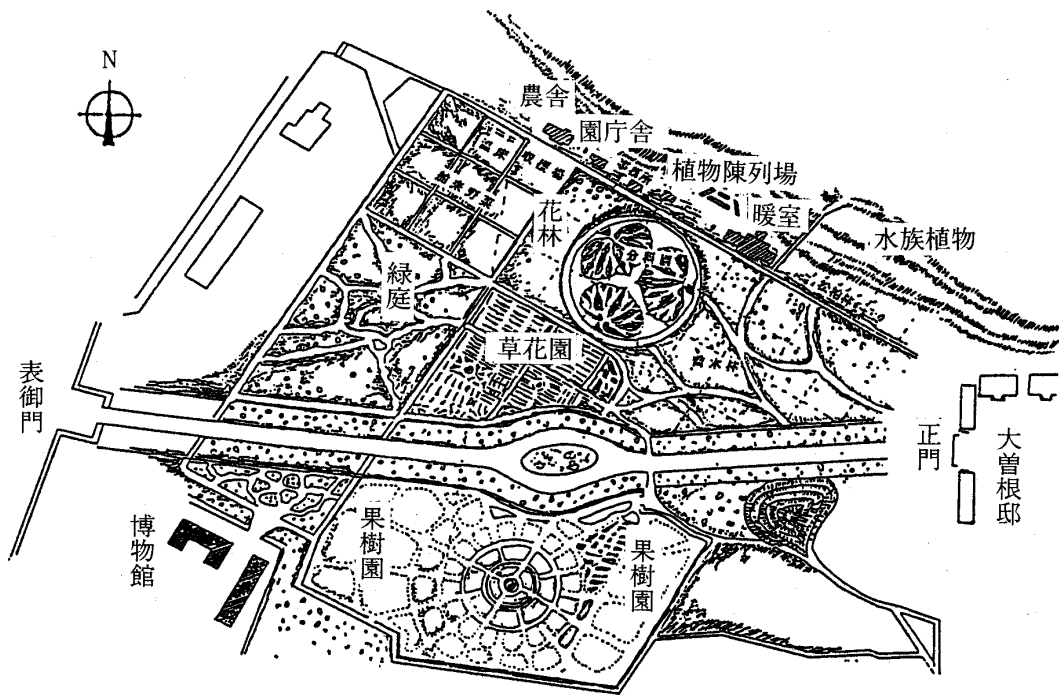


図2 大曾根徳川邸西部農園  
(名古屋市蓬左文庫蔵より作図)

曾根邸の遺構として存在し、また1号および2号土蔵も昭和10年に移築合体されて蓬左文庫旧書庫として存在している<sup>10)11)</sup>が、築山は残っていない。

西部農園の図から判断すると、徳川義禮侯邸宅が完成する(明治33年)以前にこの植物園は整備されていたと推察される。邸の完成に伴い、正門および表御門が整備され、これらを連絡する道路が新たに建設されたようである。この道路を図上から消去すると植物園内の細い道がきれいに連絡している様子が伺われる。また、植物園南部に存在する果樹園に囲まれた円形の洋式庭園の一部が連絡道路により削られたことから判断されよう。旧徳川家大曾根御下屋敷庭園の変遷<sup>4)</sup>によれば、植物園は義禮侯により明治初年頃造られたとされているが、彼は文久3年(1863)生まれで、明治9年(1876)に尾張徳川家の養子となり、明治13年に家督を継いでいることから、開設時期はもう少し後のことであろうと推察する。彼は明治17年から20年の期間に英国に私費留学しており、その間パリなども訪れている。渡航目的は不詳であるが、留学中に多くの欧州の庭園をみる機会があったと考えられ、日本の庭園とは異質の華やかな庭園に関心を持ち、帰国後邸が完成する以前にこのような洋式の庭園を整備したものと推察する。

北部農園は北部農園之図<sup>12)</sup>(図3)から判断すると、水田、畑地、樹林から構成されており、建物の記載は全くなく、面積は約12,000坪であった。また東部農園は東部農園之図<sup>13)</sup>(図4)によると、主として水田、竹林から構成され、面積は約12,600坪であった。この図には建物が数ヶ所記載され、そのうちの1つには「東御屋敷」<sup>注2)</sup>と名称も記載されている。これは光友が

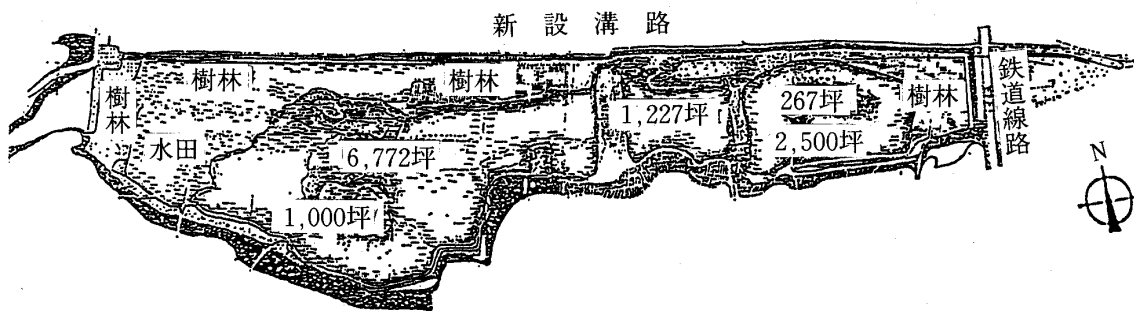


図3 大曾根徳川邸北部農園  
(名古屋市蓬左文庫蔵より作図)

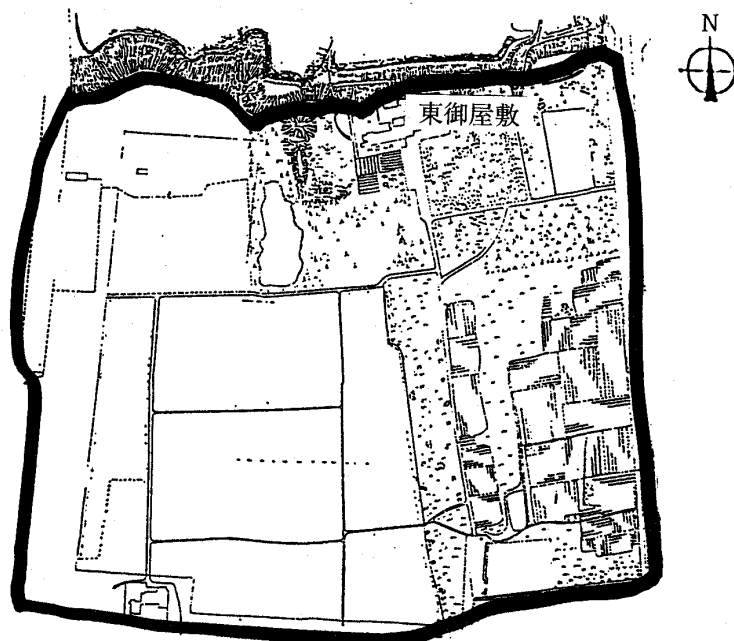


図4 大曾根徳川邸東部農園 (ワク内)  
(名古屋市蓬左文庫蔵より作図)

誕生した屋敷と伝えられる由緒あるものであり、離れ座敷（茶席）として使用していたものと推察する。東御屋敷のまわりは、前述したように石灯籠および石手洗鉢が存在していたことから判断して、本邸まわりのように和風庭園が造られていたと考えられる。

西部農園が植物園となっており、美しい花壇や珍しい樹木が植えられた研究所的観賞庭園であったのに対し、北部および東部農園の大半は、江戸期の下屋敷が本来持つべき機能すなわち火災の避難、荷物の荷場、菜園等の雑多な機能を果たす役割を担っていたと考えられる。もっとも、江戸時代中期以降、江戸文化の爛熟とともに、下屋敷は広い邸外の敷地を利用した本格的な庭園を備えた遊樂施設に変化している<sup>14)</sup> 明治初期の大曾根邸も、その庭園の様子から、両面を兼ね備えた江戸期の大名屋敷に類似性を持っていたといえる。

また北部、東部、西部農園の他に、本邸の東北方向（鬼門）および西南方向（裏鬼門）には築山があった。明治40年の名古屋市および付近図<sup>15)</sup>（図5）には、徳川邸内の池の付近および正門付近に築山が記されている。鬼門に位置する築山には鳥居が記されており、神仏を祀って

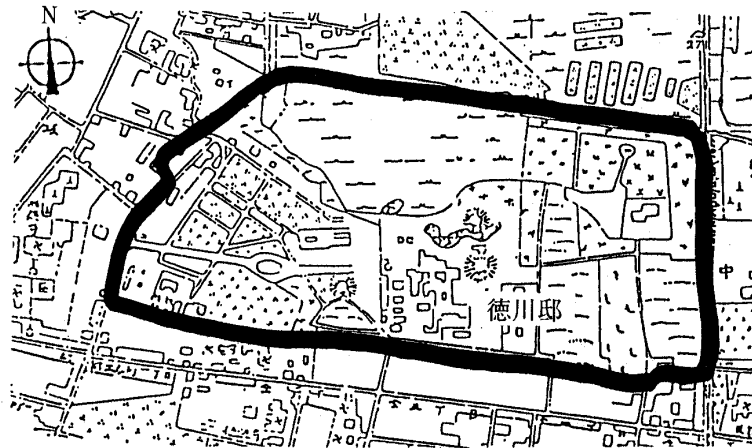


図5 明治40年当時の徳川邸の概略（ワク内）

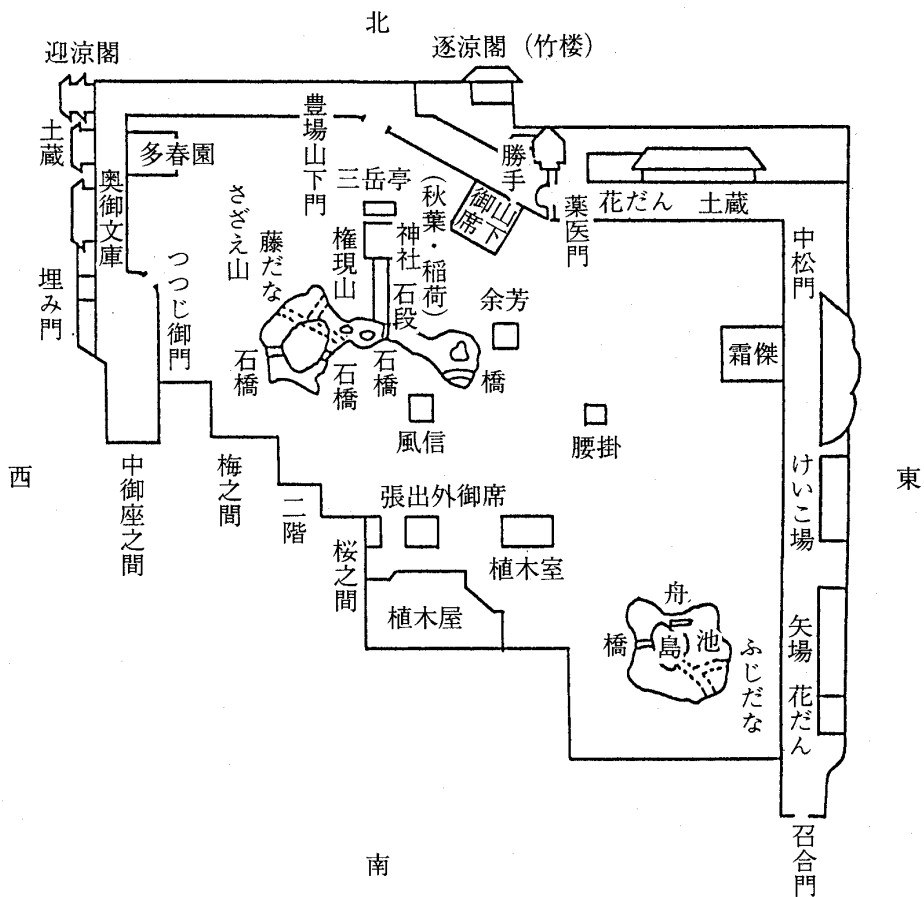


図6 御城御庭絵図（略図）

いたと考えられるが、現在では築山しか残っていない。池の形状および築山の位置は、名古屋城二の丸御殿の庭（御城御庭絵図<sup>16)</sup> 図6）と類似している。本邸を奥山町から大曾根に移した時に、庭石を名古屋城から運んで用いた<sup>6)</sup>のみならず、庭の形状も名古屋城内の庭園を模倣したのであろう。現在もこれらの築山の一部がそのまま残されており、これから判断すると起伏に富んだ庭園であったに違いない。

徳川義禮侯邸宅は、明治41年(1908)に義禮侯が亡くなった後は留守邸となり、大正8年(1919)4月には博物館を愛知県へ寄付、同年7月には敷地約8,100坪を鉄道省へ売却、昭和6年(1931)には約8,700坪を名古屋市へ、また約2,980坪を黎明会へ寄付する等により、屋敷まわりの敷地（西部、北部、東部農園）はなくなっている。

義禮侯が設けた植物園（西部農園）の存続期間は、明治20年代頃から昭和初年までの短期間であったが、園内に温室や植物陳列場を設け、円形の洋式庭園や徳川家の葵の紋をデザインした庭園を配するなどヨーロッパ的な要素を取り入れた極めて特色のある庭園が築かれていたといえる<sup>17)</sup>。

## 5. ま と め

尾張徳川家名古屋大曾根邸の庭園構成について考察した。邸の庭は、和風庭園が存在していたと考えられた。また、邸をとりまく3つの庭園（農園）があり、1つは研究所的性格を持った、西洋的なデザインを取り入れた植物園（観賞庭園）で、他の2つは菜園等雑多な機能を持った江戸期の下屋敷的要素の強い庭園（農園）であったと推察された。

注1：説明板には次のように記載されている。「つばき（つばき科） 徳川二代藩主光友公御手植のやぶつばき「葉尺八十尺樹齢350年」此古木がおしくも戦災のために焼失 今往古の姿を偲び、ここに記念のため植樹する 昭和58年 ライオンズクラブ」

注2：大正9年(1920)に取り壊され、本邸付近に移築改築された。昭和6年(1931)寄付時にも存在し、一般市民に「清流軒」として公開されていたが戦災により焼失した。現在でもその敷石が徳川園内に残っていることが確認されている<sup>18)</sup>。

## 6. 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、名城大学理工学部建築学科伊藤三千雄教授に指導を頂いた。深く感謝致します。また、史資料の提供ならびにご協力を頂いた名古屋市蓬左文庫、徳川黎明会、徳川林政史研究所の皆様にも深く感謝致します。

## 参考文献, 参考史資料

- 1) 宮崎幸恵, 徳川園の歴史的考察 (2)徳川義禮侯邸宅について, 東海学園女子短期大学紀要第29号, 1994
- 2) 斎藤俊之助編, 名古屋郷土叢書第三卷 (東大曾根町誌), 大曾根町誌刊行会, 1941
- 3) 小寺武久, 尾張藩江戸下屋敷の謎, 中央新書, 1989
- 4) 澤田天瑞, 旧徳川家大曾根御下屋敷庭園の変遷, 中部庭園同好会, 1989
- 5) 歴史的建造物研究会, 名古屋市蓬左文庫旧書庫調査報告書, 名古屋市蓬左文庫, 1993
- 6) 鈴木信吉, 黎明会記録, 財団法人徳川黎明会蔵, 1956
- 7) 名古屋市会事務局編, 名古屋市会史第6巻, 名古屋市会事務局, 1942
- 8) 大曾根徳川邸西部農園之図 (78.3×55.4cm), 名古屋市蓬左文庫蔵
- 9) 宮崎幸恵, 尾張徳川家名古屋大曾根邸 (2)建築構成の変遷について (明治33年以前), 日本建築学会東海支部研究報告集, 1993
- 10) 宮崎幸恵, 名古屋市蓬左文庫旧書庫, 日本建築学会東海支部研究報告集, 1992
- 11) 宮崎幸恵, 徳川園の歴史的考察 (1)園内の遺構とその起源について, 東海学園女子短期大学紀要第28号, 1993
- 12) 大曾根徳川邸北部農園之図 (55.5×155.7cm), 名古屋市蓬左文庫蔵
- 13) 大曾根徳川邸東部農園之図 (55.4×77.4cm), 名古屋市蓬左文庫蔵
- 14) 佐藤 巧, 近世武士住宅, 叢文社, 1985
- 15) 名古屋市及び付近図 (明治40年), 名古屋市鶴舞中央図書館蔵
- 16) 岡本柳英, 織茂三郎, 澤田天瑞, 水谷盛光, 服部鉦太郎, 名古屋城叢書3 名勝史蹟 名古屋城の庭園—今も生きている城郭庭園の歴史と秘密—, 名古屋城振興協会, 1980
- 17) 宮崎幸恵, 尾張徳川家名古屋大曾根邸 (3)庭園構成について, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1993
- 18) 宮崎幸恵, 尾張徳川家名古屋大曾根邸 (4)東屋敷について, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1994